

Understanding the Meaning of Recovery to Patients Undergoing Abdominal Surgery.

Rajabiyazdi F, Alam R, Pal A, et al

JAMA Surg : e 211557. doi : 10.1001 /jamasurg. 2021. 1557.

(Online ahead of print) 2021 May 12

背景：「術後回復（手術侵襲からの回復）」の定義や評価は、患者中心の医療を行ううえで重要である。低侵襲手術や術後早期回復プログラム（ERAS）などの研究は、在院日数、合併症の頻度、炎症マーカーや身体機能などに照準を当てていることが多い。これら評価項目は術後回復と関連性があるものの、回復過程における患者の視点を必ずしも反映しているとはいえない。

目的：腹部手術領域において、患者視点からみた「術後回復」の意義を理解する。

方法：人口動態、社会経済や医療提供体制の異なる4か国（カナダ、イタリア、ブラジル、日本）の患者を対象とした半構造化インタビューを含む質的研究である。当該データは、腹部外科手術からの回復に関する patient-reported outcome measures（PROMs）を開発するための国際間研究の一環として収集された（Surg Endosc 2018, 2020）。患者背景や外科手術における多様性を包括的に受容する目的で、インタビューの対象募集は合目的的に抽出された。すべてのインタビューの文字起こしデータは、英訳後に帰納的主題分析法（6段階）により分析された。

結果：腹部外科手術を受けた30名の患者にインタビューが実施された。国別の患者数はカナダ15名・イタリア5名・ブラジル5名・日本5名で、性別では女性が15名（50%）含まれ、16名（53%）が腹腔鏡下手術を受けていた。インタビューデータの分析から、次の5つの包括的概念（各構成概念につき5～10個の副次的概念がコーディング）が具現化された：①習慣や日常への復帰（エクササイズや職務など）、②症状の解決（腹痛、便秘など）、③精神的負担（抑うつや孤独

感など）の克服、④自立性を取り戻すこと（着替えや移動など）、⑤人生を楽しむこと（笑顔や旅行など）。従来の術後回復の指標とされる早期退院や術後合併症がないことは、インタビューの結果からは見出されなかった。

結論：患者の視点からみた「術後回復」の意義は、従来の臨床的指標よりも優れていることを示唆している。本研究により明らかにされた「術後回復」の構成概念は、診療における患者とのコミュニケーションや共同意思決定、手術成績の向上を目指した患者中心医療の戦略構築に取り入れていくべきである。

【コメント】「術後回復とは何か」という問いに、文化や医療制度の異なる国々の患者視点を取り入れ、共通概念の探求を行った質的研究である。北海道大学消化器外科学教室Ⅱ（渡邊祐介・平野聡）によって、わが国の患者視点が入り入れられた点は誇らしい。ただし、全体を通じ併存疾患を多く含む患者の視点が含まれていないため、論文の解釈において留意したい。

本研究は、「外科医は何を目的として、どんな目標を設定して手術を行うべきなのか」を再考させてくれる。これまでの手術医療において、SF 36など非特異的なQOL指標が広く用いられてきたが、本研究で得られた知見に基づく「新たな術後回復指標」の開発を期待したい。最先端の手術手技に憧れ、手術成績や診療報酬に関する定量的指標を追求しつつも、患者視点での術後回復に配慮した外科医療を目指していくべきであろう。

辻仲 眞康

（自治医科大学附属さいたま医療センター 一般・消化器外科）